

# カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

## 第V章 自然的世界

### 3 躁 と 鬱

前提的考察

#### A. メランコリー親和型性格

(1) 仕 事

(2) 対人関係

(3) 倫 理

a. 返済可能な負い目の意識

b. 返済不可能な負い目の意識

イ. 語り方

ロ. 語られている事柄

i 空間意識の変容

ii 時間意識の変容

iii メランコリーの罪責意識……（この項の途中まで前号）

B. 躁鬱病の病前性格と病状……（この項の途中まで本号）

## 第V章 自然的世界

### 3 躁 と 鬱

#### iii (つづき)

本章第1節の『生と死の統合』の項で指摘したように、彼が「省察」(160)によって己れの死を受容するに至る一見して「理性的」(158)で「平静」な態度の陰には死の願望が隠されている。とすれば、彼は詭弁的な死の

論理によって、先には一方で「血と肉体の躍動」を「おさえつけ」(161) 他方で葛藤的情念の存在を自らの目から覆い隠したように、ここでも又「どうして」という問いを力づくで封じ込め、生への執着を自ら断つ一方、死を前にした葛藤的な情念の、つまり「苦悩」の存在を自らの目から覆い隠しているのではないだろうか。「苦悩」も「どうして」も明らかな言葉としては表われていなくても、彼の口吻のうちに窺われるのではないか。

「僕の未来の奥底から、僕がすごしてきたこの馬鹿馬鹿しい人生のすべての期間、或る暗い息吹きが、まだ来ない年々を通して、僕の方へ立登ってくる。そしてこの息吹きの通過は、やはり同じように現実性のない年々を僕が生きてきた間人々が僕にすすめてくれたものを、すべて同等の価値にしてしまった。」(169) ムルソオはこれを単なる認識として語っているわけでも、死に従容として就く者の感慨として述べているわけでもない。「大きな怒り」(171) とともに「ぶちまけ」(168) ているのである。彼の「怒り」は直接的には司祭に向けられていると言えるが、彼の言葉の内容からすれば、本当は人間の「運命」そのものに向けられていると言えよう。死は彼の「人生のすべての期間」彼にとりついて離れない強迫的観念であったのだ。人間の「運命」は一方で「価値」と「選択」によって織り成される生を与えながら、他方においてその生の果てに人間のすべての営為を無に帰せしめ「馬鹿馬鹿しい」ものにしてしまう死を設けているのである。そこで、「どうしてこんなめに」と思い「苦悩」を覚えるのは当然であろう。だが「どうして」と「苦悩」は語られず、ただそれらに由来する「怒り」だけが司祭への憤怒という見掛けの下に表出されているのである。死という人間の「運命」を前にした「苦悩」と「どうして」という問いはこのように主人公＝語り手の意識からは隠されているが、しかしやはりそれは語り手を掣肘しその解決を無意識裡に求めさせている。

ムルソオは続けて、次のように言っている。「人々の選ぶ生活、選択する運命などが何だろう。たったひとつの運命が僕自身を選び、僕とともに数百

万の特権者を選ぶ筈である以上。〔……〕特権者しかいはいはしない。他の人々も又、いつか死刑を宣告されるだろう。(169-170. 傍点は鈴木、以下同じ) ここでムルソオは、死という「たったひとつの運命」が「他の人々」をも待っているのだとだけ言っているのではない。「死刑を宣告される」のだと言っているのである。主人公＝語り手ムルソオにこの表現を選ばせながら彼自身にはしかとは意識されていない思想とは、人間はすべていずれは処刑死という罰を科されるのであり、死とは罰なのである、裏返して言えば、生とは罪であるということなのだ。生きること自体が罪であるのならば、死は当然の罰として「うけいれられ」るものとなろう。こうして死を前にしての「苦悩」と「どうして」という問いは暗々のうちに解決をみたことになり、明示的に表出される必要がなくなったのである。

生が罪であるとは、ムルソオ個人についてではなく人間一般について言われているのであるが、それにしてもやはり「存在の罪」と「存在の悔い」が語り手自身にもそれと気付かれない形で問われていたのである。「存在の悔いにおいては行為はその悔いの広さや深さの点で比較にならぬほど小さい」<sup>274)</sup>から、罪の機縁としての「このことをし、あのことをしなかった」(169)ことや「人々の選ぶ生活、選択する運命」そんなものが「なんだろう」(170)ということになるのである。

成程一面から見ればムルソオの意識は、このように一方で処刑死を死一般に摩り替えることによって自分の「行為の罪」を不問に付し、他方で人間一般の死を処刑死に摩り替えることによって自分の「存在の罪」を不問に付すことに成功しているかとも見えるのであるが、しかし他面から見れば、「人は死ぬ」(160)ということと人間「すべてが死刑囚なのだ」ということは彼自ら認めるように「同じことではない」(164)し、死が死刑であり罰であると生は罪であると彼は「確信」しているであろうが「他の人々」は決してそうではないのだから、彼の「意識下」の「自責感」が「苦悩の意味への問い」への「答の方向を前もって決定してしま」ったのであり、又「自責感」

が「意識下」なるが故に直接的に自分の「行為の罪」と「存在の罪」を問う路を塞がれているので、人間一般の「行為の罪」と「存在の罪」を問いこれに罰を求めているのだと言えよう。いきなり人間一般の「存在の罪」が「行為の罪」を跳び超えて問われているのは、一方においては、たとえ人間一般についてであろうと「行為の罪」は問わない方が罪責感は「意識下」により安全に保たれ続けるからであり、他方においては、昂進した無意識的罪責感の代償的な表現形式としては人間のあれこれの「行為の罪」の主張よりは人間の「存在」そのものの断罪の方がよりふさわしいからでもあるが、しかし又ムルソオの「行為の罪」は即「存在の罪」なので「存在の罪」に重ねて「行為の罪」を問う必要はなかったからなのではないかとも考えられよう。

先に、公判の審理経過を分析して、そこに審理「の方向を前もって決定してしまう」ムルソオの無意識的罪責感を推定し、この罪責感の核心を成しているものは「母を心の中で殺した」という妄想的確信であると述べておいた。母親殺しは「行為の罪」であると同時に「存在の罪」でもある。何故ならば、母親は「自己」の「相手」であるとともに「自己」と「相手」がそこから分離して出てくる「源泉のような場所」でもあるからである。だから死刑囚ムルソオが人間の「存在の罪」に名を借りて罰しようとする自分の「存在の罪」とはやはり「行為の罪」即「存在の罪」としての母親殺しなのである。

ただ、重罪被告としてのムルソオが「すべて健康な人間は、自分の愛する者の死を多少とも希った筈だ」(94)と言って自分の「罪」を人間一般の「罪」に摩り替えつつも、人間一般の「行為の罪」の名においてではあるが「罪」とその「意味」あるいは「起源」としての母親への殺意をなお結びつけて捉えていたのに比べると、死刑囚ムルソオは「彼〔司祭〕が殺人罪で告発され〔ながら〕、母親の葬式で泣かなかったために死刑を執行されるとしても、それが何だろう？」(170)と言って、母親殺しは人間一般の「罪」の下においてすら「罪の意味」と「起源」の位置から外されてしまってい

る。だからこそ、先ず自らの「罪」であることを否認され、次いで母親殺しというその真の「意味」を「起源」から分離された「罪」は人間一般の「存在」そのものの「罪」として問われることができたのでもある。とすると、「自責」が確とは現われてはいなくても「罪の機縁」そのものは「見出されて」いたと見える重罪被告の時期の方が、具体的な「罪の機縁は発見されず、むしろ否定されている」と見える死刑囚の現在よりメランコリーは「重症」であったということになるのであろうか。しかし重罪被告の時期にあっては、母親殺しは「すべて〔の〕健康な人間」に可能な「罪の機縁」として認識されているのであって、自分の「罪の機縁」であることは「否定されていない」たのであり、他方死刑囚の現在においては、成程あれこれの「罪の機縁」は「発見され」ていないが、しかし時を極限にまで遡って人間の誕生そのものが「罪の機縁」として「見出されて」いるのである。確かに「存在の罪」は人間一般について問われているのであるが、しかし人間一般の「存在の罪」に名を借りてムルソオの無意識的罪責感が自分の「存在の罪」を咎めているのだとすれば、そして「メランコリーが深まれば深まるほど、それだけ罪責内容は現在から遠く離れた時点に求められる」とすれば、一見するところとは逆に、「罪の機縁」としての母親殺しの強迫観念が意識下に一層押し下げられたと見える死刑囚の現在の方が、重罪被告の時期よりはるかにメランコリーは増悪していると言わなければならないまい。つまり、いずれにあって、「自責」は訴えられていず、それは一貫して「意識下」に留まり続けるのに変りはないにしても、重罪被告の時期においては、彼の無意識的罪責感は「人間の裁き」が科す最悪の罰としての死刑判決を目差して予審及び公判の審理「の方向を前もって決定してしま」ったのであり、被告＝語り手の意識に映る審理経過とは彼の無意識的罪責感に合わせて象られたものにすぎなかったのであるが、死刑囚の現在においては、その無意識的罪責感は「人間の裁き」にも飽き足りず死刑囚＝語り手の「省察」の「方向を前もって決定してしま」い、「神の裁き」を持たない人間にとっての「〔原〕罪」として

の「存在の罪」に思い至らせ、神に代る「運命」が下す罰としての死を「うけいれ」させるのである。

死刑囚ムルソオの心の深層におけるこのような無意識的罪責感の昂進とメランコリーの増悪を背景に置くことによって、一方での「僕は〔……〕いつでも正しい」という自己の絶対的「正当化」(169)と他方での「他の人々もまた、いつか死刑を宣告されるだろう」という人間一般への断罪が果している役割がよりよく了解されよう。それらは暗さを増した地としての鬱に対する〈気負い〉に充ちた表層の凶としての躁であり、躁的防衛なのである。メランコリーの罪責感<sup>1</sup>は投影されて人間一般の「存在の罪」のうちに隠され且つ人間一般の「存在の罪」のうちに顕われているのである。

メランコリーの罪責感の昂進を前提すると「殺人の罪を問われ〔ながら〕、母親の葬式で泣かなかつたために死刑を執行されるとしても、それが何だろう？」という言葉もよく了解される。ここでは「殺人」と「泣かなかつた」という二つの「罪の機縁」が等置されている。それというのも、躁的防衛によって意識の水準では自己の「無罪」(134)の「確信」を辛うじて保持しつつも、無意識の水準では自己を「第一次的に罪あるものと感じて」いるメランコリー者は「自分が罪責的であるための機縁」を無意識裡に身に引き寄せるのであるが、その「第一次的」な罪責感からすれば罪の「機縁」そのものは「すべて同等の価値」の「交換可能」なものに見えるからなのである。どのような罪の「機縁」であろうと、ムルソオは罰としての死を拒まないであろう。

メランコリー者の罪責感とそれが発現する機縁としての罪ある行為との間に「はなはだしい不一致」が観察されたり、「メランコリー者の罪責妄想においてしばしば途方もない姿を示す罪責感が、なんでもない、あるいは空想上の罪の機縁に向けられる」<sup>275)</sup>ことがあるというのも、「罪の機縁」が「空想的あるいは妄想的であるからばかりではなく、罪責感と機縁との関係が「空想」的、あるいは恣意的であるからでもある。それ故にこそ機縁は「交

換可能」なのである。この罪責感と罪の機縁との関係の「空想」性乃至恣意性は主体と罪責感との関係の「空想」性乃至恣意性の、即ち主体に対する「負い目という主題」の「超主体」性と相関的である。「自己はみずからの主題をもはや『処理』しえなくなり、かえってそれに追いまわされ、この主題からの支配を受けてしまう。』<sup>276)</sup> つまり「主題」が「自己」を「機縁」として発現するのである。そしてこの「主題」と「自己」の関係が恣意的なものである限り、「機縁」としての「自己」がどうして「交換可能」でないわけがあろう。「どうしてこんな」罪責感(「主題」)が、そしてそれが発現する「機縁」としての「行為の罪」がまさにこの私を「選び出」さなければならぬのか。実際ムルソオは「彼〔司祭〕が殺人の罪を問われ、母親の葬式で泣かなかったために死刑を執行されるとしても、それがなんだろう？」と言っている。メランコリー者においては「行為の罪と存在の罪、行為の悔いと存在の悔いは、根本において不可分のものである」<sup>277)</sup> からは、「殺人」や「泣かなかった」という「行為の罪」は容易に「存在の罪」を惹起するのであるが、この「存在の罪」も又まさにこの私を「選び出す必然性はどこにもなく、「偶然の結果」(135)にすぎないと見える。それ故ムルソオは「彼〔司祭〕もまた死刑を言い渡されよう」(170)と言うのである。「メランコリー病相期においては、自己はみずからの負い目にも、あるいはみずからの悲哀にも、すっかり身を委ねることができない」<sup>278)</sup> と言われる事態の一つの表われをここに認めることができよう。「殺人」も「泣かなかった」こともそして罪としての「馬鹿馬鹿しい人生」ももはやムルソオその人に固有に係わる事柄ではない。「負い目」も「悲哀」もその来歴を否認されて「みずからの」ものではないと見えるからには「自己」がそれに「身を委ねることができない」のは当然のことである。

こうして残るのは「みずからの」内容を持たない来歴を否認された「自己」であり、限定されない「絶対に、誰しもと同じよう」(95)な「自己」であるが故に「交換可能」な「自己」である。他方、「自己」との絆を否認

されそこから切り離された「有罪」性は人間一般の根源的「有罪」性即ち「〔原〕罪」となり、「交換可能」なあらゆる「自己」を「機縁」として発現し、世界を席捲する。「自動人形のような女」も「マソンが妻にしたパリ女」も「マリーと同様に有罪」(170)なのである。無限定的な「自己」の相貌のままに「恐怖」(144)すべき「空虚」(143)を前にして「自己抹殺への呼びかけ」を「心を感じた」メランコリー者は、同時に覚える「激しい恐怖」<sup>279)</sup>から逃れようとして、内向的攻撃性を外向的なものに転化し、「他の人々」すべてに「有罪」を「宣告」し死の罰を科すのである。かくして「交換可能」な「空虚」で「ゼロに」(147)された無力な「自己」は、逆説的に、「他の人々」すべてを断罪する全能の審判者となるのである。このような心理過程を精神分析学は躁的防衛と呼ぶ。司祭を前にして示されたムルソオの激昂をそのように解したとき、一方では、「すべて同等の価値」に見えるという「選択」の無意味な状況、つまり「去就不明の並列関係の中で、いっさいの動きが停滞してしまう」<sup>280)</sup>というメランコリー期の「発端のひとつ」としての「絶望の状況」<sup>281)</sup>があり、他方では、そうした状況に身を置く者の口から「僕は〔……〕いつでも正しい」と「自己」の絶対的な正当性を主張する言葉が吐かれ、その口吻に「万能感、とくに対象の万能感的な支配」が、即ち「抑うつ諸感情に対して防衛的に働くもの」としての「支配感」や「征服感」(「他の人々もまた、いつか死刑を宣告されるだろう」)及び「軽蔑」<sup>282)</sup>(「彼〔司祭〕の確信はどれをとっても女の髪ひと筋の値打もない」(169)、「レエモンが、彼よりすぐれた人物であるセレストと同様に僕の仲間でも、それが何だ？ マリーが今日新しいムルソオに唇を与えたとしても、それが何だ？」(170))といった躁的な諸感情が如実に窺えるという、一見したところ矛盾した事態が了解されうるものとなる。背景にある鬱からの超出として、鬱が淵源する「自己」固有の「真実」(169)としての「心的現実」を「否認」<sup>283)</sup>するための前景として絶対的な自己正当化や「万能感的な支配」という躁があるわけなのである。



こうして「単極性のメランコリー」の病前性格であるメランコリー親和型性格とそのメランコリー期の病状を範型として、それに照らし合わせてムルソオの言動を理解しようとする本項の企てはその限界に立ち至ったことになる。次項においては、躁鬱病の病前性格とその病状を範型としていま一度ムルソオの言動を見直してみよう。

## B. 躁鬱病の病前性格と病状

本項の課題は、精神医学が呈示する両極性躁鬱病者の病前性格とその病状を範型としてムルソオの言動を前項までとは別様の角度から見直すことである。だが先ずこうした課題設定自体が可能かどうかが問われなければなるまい。

テレンバッハによれば、「両極性躁鬱病者の人物像には、ほとんどの場合にはメランコリー親和型の性格標識が見出せるものの、それに単極性メランコリーには見られないいくつかの標識も加わっている場合がある。[……]また、主として躁病的な揺れを示す患者、あるいは躁病相しか示さない患者には、メランコリー親和型の標識はまったく認められないか、あるいは逆転した像を呈することがある。」<sup>284)</sup> テレンバッハの言うこのメランコリー親和型性格の、より正確には、これに「対他的配慮の裏打をもった秩序愛」という観点から笠原が手直しを加えたメランコリー親和型性格の諸特徴がムルソオの性格のそれでもあることを前項までにおいて拙論は確認しえた。それ故、「躁病相しか示さない」場合は無論のこと、「主として躁病的な揺れを示す」場合も考慮に入れる必要がないことは明らかであるし、もし単極性と両極性に共通の性格標識に加えて、「単極性メランコリーには見られないいくつかの標識」がムルソオの行動と思考の様式のうちに前以て認めることができるならば、本項の企図はある程度成果を期待しうると言えることになる。

テレンバッハが精神分析学の、とりわけアブラハムの知見を援用しつつ

躁鬱病者の病前性格の特徴として挙げているのは、①「同一人物に対する愛・憎の両価性」②「リビドーのポジティブな付与の不能に由来する典型的な作業努力」③「メランコリー以外の時期にも認められる愛の対象へのリビドー備給の固着」と「愛の対象への強い固着が生じているのに、同時に一方では対象備給の抵抗性が少ないという点」及びそこから結果する「ナルシズム的な対象選択」④「節約と頑固さ」に加えて「頑固さや強情と異常な寛容やお人好しとの交替」（以上傍点は原著者）⑤「《食欲に》対象界へと向って行くことができるという能力」あるいは「愛の対象の摂取と排出を交互に反復する能力」⑥「サディズムに源を発する権勢欲」⑦「独善性」即ち「ひとりよがりな与えかた」あるいは「自分に向けられた願いや要求を多くの場合に拒絶し、それもそれについてまるで意に介することすらない」等である<sup>285</sup>。更にこれら精神分析学の指摘するところとは別にテレンバッハが単極性と両極性を区別する指標として先ず第一に掲げている「生命的意味内実の発達」の如何を⑧として加えることができる。このうち①から③は単極性と両極性躁鬱病者双方の病前性格に共通する特徴であるが、これらはムルソオの性格特徴でもあることは前節までの分析によって明らかであると考えられるから、ここでは再説しない。以下両極性躁鬱病者の病前性格の「いくつかの標識」である④から⑧までをムルソオの性格が兼ね備えているかどうか検討してみよう。

④ ムルソオの言動の明示的な部分に目を止める限り、彼には「節約の極端な形態（けち）」<sup>286</sup>を証し立てるようなものは何も認められない。とはいえ、彼の語る『異邦人』という物語の重要なモチーフの一つが金銭であることも又確かなことなのである。彼が母を養老院に入れたのは「看護婦をつけて世話するだけの金がないからだ」（125）だった。レエモンが情婦を殴りそれが遠因となってムルソオが殺人を犯すことになったのも金銭上の「ごまかし」（47）があったからだった。飼犬を野犬収容所から引き取るに当っては税金を支払わなければならないと聞いたサラマノは、「あのくたばりぞこな

いのために金を出すなんて、ああ、くたばっちゃまえばいいんだ！」(60)と叫ぶ。前章で指摘したようにサラマノとその飼犬との関係はムルソオとその母の関係とある程度平行関係にあり、又次章で見るようにレエモンとその情婦との関係にもムルソオとその母の関係との平行関係が認められるのであり、サラマノとレエモンが、ある程度という限定付きではあるが、ムルソオの分身あるいは影の役割をこの物語の中で果していると言えるからには、「節約」をムルソオの性格を構成する潜在的な契機の一つとすることはさほど強引な推理ではないであろう。しかも他方で彼が、殺人を犯したことではなく「母親の葬式で泣かなかった」(170)ことの「償い〔支払い〕(payais)」(166)をするために己が生命を差し出して途方もない気前のよさを示しているからには尚更のことである。というのも、「頑固さ」と「異常な寛容」との「交替」が両極性躁鬱病者の病前性格の特徴であるとするなら、「節約」についても同じことが言われて、もし表面に「異常な」までの鷹揚な振舞いが際立って見てとられるならばその陰に隠れた「けち」を想定できようからである。勿論ムルソオの気前のよさは金銭や物品にではなく己が生命に対して示されているのではあるが。

⑤ メランコリー親和型の人が構成する状況の空間的な「布置」は「封入性」であり、時間的なそれは「負目性」である。封入性とは「みずからを秩序の中に閉じこめること」であり、「求心的防衛」の機能をもつ「境界のうちに閉じこめられ、あるいは自分を閉じこめ」て「この境界を乗り越え」ることが「遂には不可能になってしまうという布置」<sup>287)</sup>のことである。「負目性」とは「自己自身におくれをとること」であり、「自己の要求水準におくれをとる」ことがどんな場合においても「負い目を負うこと」<sup>288)</sup>になってしまうことである。そして、両極性の躁鬱病者はこの「封入性を突破する能力」を備え、「負目性を躁状態における病的な『みずからに先立ってある』<sup>インクルデンツ</sup>形式に変更する可能性」<sup>レマネンツ</sup>を有する。それは又、「《貪欲に》対象界へと向って行くことができるという能力」を、「愛の対象の摂取と排出を交互に反復す<sup>ジツヒ・フオアヴエック・ザイン</sup>

る能力」<sup>289)</sup>(以上傍点は原著者)をもつということでもある。

母親を亡くしてからアラブ人を殺害するに至るまでの間、ムルソオが「身ミを置いてナインゲヘエーレンいる」<sup>290)</sup>生活空間とその「身の置」き方を見ると、彼は「確固たる一貫した付託連関によって分節された節度ある空間に自分を組み込み、その空間に同化し、そこを離れない」<sup>291)</sup>と、「自分流の居場所の構えかた〔……〕を絶対に崩さない」<sup>292)</sup>と見える。彼は「三年前」(11)母を養老院に入れ、「めいめいの新しい生活に馴れていった」(125)結果「習慣」のせいで「今年になってから殆ど」(12)母を見舞うことをしなかった。「アルジェの光の巢」(30)の中に「自分を組み込み、その空間に同化」している男にとってそこから「八十キロのマランゴ」(9)を訪うことはもはや「骨折り〔労苦〕(effort) (12)にすぎなかったのである。彼は社長の勧めるパリ転勤を辞退して「もっとも貧弱だがもっとも長続きする歓びを見出してきた生活」(148)を「離れ」ようとせず、「《人生の冒険》(Wagnis des Lebens)を引き受けよう」としない傾向<sup>293)</sup>を示して、「野心を持たないが、それは事業をする上で致命的なことだ」(64)と社長に非難される。彼は「目を瞑って歩けるほど通い慣れた道」(137)によって結ばれた「僕の寝室」(34)と「会社」(40)と「セレストの料理店」(10)からなる「僕の愛する町」(148)の「境界」の内側で、セレストやエマニュエルなど「名まえを名ざす」ことのできる親和的世界の住人達との「对人的秩序の中に」<sup>294)</sup>、彼の「愛する、街の親しみ深い物音」(137)や「夏の匂い、〔……〕ある種の夕空」(148)といった対物的秩序の中に、「身近な人や物との交りのすべての綾に織り込まれ」<sup>295)</sup>て生きている。彼は彼自らによる「境界の踏み越え」を「おそれ」<sup>296)</sup>るとともに、前節で見たように、とりわけて「対人関係の秩序の障碍」をもたらすとされる「病気や死などの偶発事件」<sup>297)</sup>(傍点は原著者)に「基底的不安」に彩られた心気的な眼差しを向ける。だが彼の「僕は不意打ちを食うのは、いつも好まなかった。何かは僕の身に起るとき、その用意をしていたかった」(158-159)という、「人生における『あるべからざること』(Unfug)としての偶発事ツーフアルか

ら身を守ろうとする努力<sup>298)</sup>にも拘らず、彼の「すべてが近さ（Nahe）へと向って〔……〕共感的・共生的な交わりの意味での『近親者』との近さへと向って——設定されている」母との幻想的一体感を中核とする「秩序空間」<sup>299)</sup>は母の死によって根底から震撼されるのであり、その現実を否認するが故に母の「埋葬のとき」彼の「心は完全に麻痺してしまい泣くこともできなかった」のだし、母の喪失の自覚とともに「人生は《無意味》に思えた」<sup>300)</sup>が故に「人生は生きる労をとるに値しない」（160）と後に言うことになるのである。

このように彼は「秩序固着性」<sup>301)</sup>と「<sup>ウンユーパーシュータイフバルカイト</sup>乗り越え不能」<sup>302)</sup>を明白に示している。と見えるのであるが、しかしながら他方では、『生肯定的自然』の「活動」・「性愛」・「睡眠」の各項で見たように、彼はメランコリー親和型性格者の知らない「身体領域への没入」<sup>303)</sup>を知ってもいるのである。更に、既述のように、鬱の増悪に伴って攻撃性は内向し自己破壊の衝動が昂まってくが、「すべてがゆらめいたのは、そのときだった。海は濃い熱い息吹きをもたらした。空は真二つに裂けて火の雨を降らすと思われた」（88）という、まさに己れ諸共全き無秩序のうちに「全世界が崩れ落ち」<sup>304)</sup>んとする「そのとき」に、彼は攻撃性の向きを外界へと転じ、自ら「『あるべからざること』〔不法〕としての偶発事」を惹き起こして殺人を犯すに至る。たとえそれが、「均衡」即ち己れのそれまでの生活空間の秩序性を自ら「破壊してしまった」と「理解」するメランコリー者の蘇った秩序意識には、「不幸の扉を叩」（88）ただけの幕間狂言にすぎなかったと映るとしても、つまり「封入性」の「突破」が、親和的秩序空間から「僕の独房」と「傍聴席と法廷の空間」（148）という敵対的秩序空間に移行する刹那に咲いた徒花にすぎないと、「みずからの秩序の制約から逃れうるのはただ、みずからを別の秩序へと制約することによってのみだった」<sup>305)</sup>としか見えないとしてもである。

さて、「<sup>負目性</sup>」も又ムルソオの生きる状況の特徴的な「<sup>布置</sup>」であると見える。メランコリー親和型性格者の「<sup>根本気分性</sup>」即ち「配慮しなくては

ならない義務に迫いつけなくて、取り残されるのではないかということに関しての臆病さ〔怯え〕(Furchtsamkeit)<sup>306)</sup>を分かちもつが故に、彼は例えば「僕のせいじゃない」(10)という「釈明」(11)の言葉を衝動的に口に乗せ、『返済可能な負い目の意識』の項で仔細に見たように、「もろもろの必要事に対する負債が、回避されうるかどうかについての気がかり (bängen)<sup>307)</sup>(傍点は原著者)から「用意周到に、几帳面に、そして誠実に配慮する」<sup>308)</sup>のである。そうした「気がかり」の極端な現われが、同じく『返済可能な負い目の意識』の口.の項で見たような、「予想される負い目をすべて前もって返済しておこうとする」<sup>309)</sup>あるいは負い目を負わせることの負い目をすら「回避」しようとする「配慮」なのである。

しかしながら、彼は他方では、母親の葬式の時「ママに会いたくないと言」い「ママの顔を見ようともせず、煙草を喫い、眠り、ミルク・コーヒーを飲」み「一度も泣か」ず「葬式の後で、墓の傍で瞑想に耽らず、すぐに帰ってしま」(127)うという「息子たるもの」(129)には「あるべからざること」を犯し、内心ではそこからくる「怯え」を「まったくどうでもよいことだ」(17)と一蹴することができる。又、彼の内面の前メランコリー状況の「狭められた状況、あるいは全く逃げ道のないように思われる状況」<sup>310)</sup>の投影とも思われる「あたりのすべてが殻を閉じてしまったかのように」感じられる状況に陥りながら、「その瞬間、撃つことも撃たないこともできる。どっちでも同じことだ」(84)と言うことが、「負目性」への「気がかりな関心」<sup>311)</sup>を一瞬のうちにすべて没却することができる。それどころか、殺人という「あるべからざること〔不法〕」の最たることを犯すすらするのである。

このような、一方で「封入性」と「負目性」の刻印を受けた状況に「閉じこめられ、あるいは自分を閉じこめ」ながら他方ではそれを「突破」という、ムルソオの思考と行動の上に認められる矛盾は、刑務所付司祭に彼が「大きな怒り」(171)をぶつけるに至る過程にもはっきりと現われている。敵対的世界の中に「閉じこめられ」ながら速かに自ら「自分を閉じこめ」て

「四人の考えしか持たなく」(109)なり、「もの分りがいいな、君は」(111)と看守長に褒められるほどの「模範的な」(147)四人に成り果せる。予審判事や弁護士と会うときには「『家族の一員であるかのような印象をさえうけた」(102)と言うほどに、敵対的世界の直中であって「和気に充ちた」(101)「対人関係の秩序」を仮構しそこに埋没する。「人間の正義」(144)と「社会の最も本質的な掟」(145)が支配する「傍聴席と法廷の空間」の中で己れを「ゼロに」(147)扱われながら敢て異を呈することもなく、彼の「首をはね」ることを決めた「空間」に束の間浮ぶ「尊敬」と淡い「優し」さに包まれて「もう何も考えなかった」(151)と、「共感的・共生的な交わり」の幻に浸って倦むところがない。

その模範囚、模範的被告ムルソオが、彼の泣き所を誤たず突いた、司祭の「我が息子よ」、「私はあなたの身内です」(168)という「愛における共存の秩序」<sup>312)</sup>(傍点は原著者)への呼び掛けを耳にすると、まさに「このとき」彼「の中で何か破裂」(168)し、「人々が司祭を」彼の「手から引き離し、看守達」が彼「を脅か」(170)さなければならなかったほどの暴力を振ってそれまでの模範囚の装いをかなぐり棄てて、それが支えてきた「対人関係の秩序」を自ら破壊してしまう。そして「僕は正しかったし、今も正しく、いつでも正しいのだ」(169)と断言して、すべての「負目性」を振り放してその遙か彼方にまで「先立ってある」ことができる。

死刑判決後の「横になると空が見え、それしか見えなかった」(152)という独房の中で、「明け方」と「上訴」(158)に思念を集中し、更には「自分の呼吸」が「犬の喘ぎに似てくる」ことに覚える「恐怖」(159)そのものに化すという生活空間の「狭小化」<sup>313)</sup>が、「大きな怒り」によって一挙に「破裂」し、続く「解放」の場面では「眠りにおちた夏の素晴らしい静寂が潮のように」ムルソオ「の内部に流れ込んだ。」(171) 彼はそこで、「四人の考え」が紡ぐ「秩序空間」はもとより、メランコリー者がそれを築く土台となる「人間社会」そのものからすらも「離反」(144)して「僕と永遠に関わりいな

くなった世界」(171)と言い切ることができる。そして彼はおよそ人間的秩序というものの存しえない「世界の優しい無関心に、自分を開いた」(172)のであるが、それは又いかなる「負目性」とも「無関心〔関わりのない〕世界なのである。

更に又、彼はこのとき、自らのうちに「摂取」し同一化していた母という「悪を排出し」(171)て「《貪欲》に対象界へと向って行くことができる」ことを、「すべてを生き直す気持になっているのを感じる」(171)という言葉で示している。

⑥ 「《だれひとりとして彼ら〔自分ら〕自身以上にうまくやれる人はいないのだから、自分ですべてをやらなくてはならない》という確信」を、単極性躁鬱病者は「自己が自己に課している要求におくれをとることへの不安」から抱き、両極性の者は「サディズムに源を発する権勢欲」から抱く<sup>314</sup>。この文脈では、「権勢欲」は仕事の世界に限定されている。ムルソオの仕事振りについての言及そのものが少ないので、彼がこの意味での「権勢欲」と「不安」のいずれをもつとも推断することはできない。しかしこの「権勢欲」を対人関係と倫理の世界にも当て嵌めてよいなら、先の項で見たように、「僕は正しかったし、今も正しく、いつまでも正しいのだ」とする一方、「ゼロ」の身から一挙に「たったひとつの運命」(170)に「なり代」(147)って恰も全能の審判者でもあるかの如く「他の人々も又、いつか死刑を宣告されるだろう。〔……〕小柄で自動人形のような女は、マソンが妻にしたパリの女と、あるいは僕と結婚したがったマリーと同様に有罪だ」(170)と人間一般を断罪し死刑を科すところに「サディズム」とそこに「源を発する権勢欲」をみてとることは可能であろう。

⑦ ムルソオの「独善性」ということが言われうるとすれば、それは「与えかた」にではなく専ら「拒絶」についてである。社長のもちかけた「パリで暮して、一年のある部分は旅することができる」という「若い」(64)勤人には願ってもないと思われた転勤の話は彼は事も無げに断わり、マリーの



「愛」の贈与は「たぶん愛していない」(64)とすげなく去なし、「自然の感情を押さえていたと言ってよいか」と言って彼の被告としての立場を少しでも良くしようとする弁護士の計いに「いや、それじゃ嘘になります」(94)と水を掛け、彼を「助けたいと思っている、[……]神様の助けがあれば、何か」彼「のためにできるだろう」(97)と言って言わば魚心あれば水心と情状酌量もありうることを仄めかす予審判事には「神様」を「信じない」(99)と「自分の行為を後悔して」(100)いないと答えて差伸べられた救いの手を払い除けてしまう。こうしたムルソオの「拒絶」は、既に仔細に吟味してきたように、彼の主観に則して見れば決して「ひとりよがり」とも「それについてまるで意に介することすらない」とも言うことはできないのであるが、しかし社長は「不満そうな様子」を示し、マリーは「暫く口を噤んで、黙ったまま僕の顔を見た」(64)、弁護士は「奇妙な様子で僕の顔を眺めた。僕に対して少し嫌悪を感じたかのようなだった」(94)、予審判事は「僕の言うことが分からない様子だった」(100)というところからすれば、彼の「拒絶」はそれを蒙った者達の目には「ひとりよがり」で自分達のせっかくの好意(贈物)を「意に介することすらない」と映ったことであろう。

⑧ 単極性と両極性の躁鬱病者を別つ標識としては、その本質的な重要性からすると、これこそ先ず第一に取りあげられて然るべきものであろう。テレンバッハは「毎日を送り、年齢を加える現存在にとっては、昼夜や四季がそれぞれの意味内実をもっているし、食欲や渴きや性欲などの要求にとっては、食べられるもの、飲めるもの、性的魅力をもつものが、それぞれの意味内実をもっている。[……] こういったいくつかの生命的意味内実が、メランコリーにおいて変化をこうむることは明白な事実である。[……] メランコリー親和型となづけた単極性メランコリーの病前性格 [……] において、こういった生命的意味内実の発達がもともとあまり力強くないという事実は、著明な躁状態への振れを来しやすい素因をもった病前性格 [……] との比較から——ことに躁病期そのものにみられる生命的な活力との比較から

——明らかである」<sup>315)</sup>と述べ、更に後注において「これはとりわけ性的領域に——さらには陶酔にかかりうるすべての事態に——あてはまる。メランコリーと陶酔は両立しない」<sup>316)</sup>と付言している。ただ、両極性の躁鬱病者と雖も、鬱状態に陥りうるということは、彼にあっても「生命的意味内実」が常に「力強」いとは言えないのであり、そこにはある種の脆さと不安定さが潜んでいるということであろう。そして彼にあっても、「生命的意味内実」の減弱に伴って生活世界の「空虚化」が生じ、それと平行して彼も又「心氣的」にみずからの身体に目を向けるように<sup>317)</sup>なるのである。

『生否定的自然』の項で指摘したように、ムルソオは心気症様の愁訴を頻繁に洩らすし、独房においては睡眠・覚醒のリズムが崩れ、「はじめの数カ月」(109)の後には食欲や性欲に係わることには一切言及しなくなってしまう。

しかし他方では、これも『生肯定的自然』の項で見た通り、彼の食欲や性欲がそれらの対象に豊かな「意味内実」を付与していたことも確かであり、彼にとって「夕方は昼間の仕事の完了を意味」し「夜は眠りへのいざないを意味」<sup>318)</sup>していた。そして「陶酔」とは世界との合一感の謂であるが、彼の眠りはまさに一つの陶酔であったし、マリーとの「一致」(76)という性の陶酔も語られていたのである。

以上躁病相を示しうる両極性躁鬱病者の病前性格に認められる典型的な特徴のいくつかをムルソオの性格上にも確めえたことから、本項の課題とするところもある程度その実りを期待できることになったが、そこで当然の疑問が提出されるであろう。即ち、単極性の躁鬱病の病前性格即ちメランコリー親和型の性格像というモデルに照してこれまで充分分析可能であったムルソオの言動が、ここで更に両極性の病前性格像に拠っても分析されうるという予測が立つのは何故なのかということである。答えは、両極性の躁鬱病の病前性格像のうち単極性のそれが収まりうるということ、裏返して言えば、単極性の病前性格のうちには両極性のもう一つの半面としての躁病相を展開

しうる萌芽が潜在しているということ、つまり単極性も両極性も少なくとも理論上は同一の構造をもっているということであろう。事実、後述する森山やクラウスはそうした見地に立って理論構成している。

そこで、以下においては、先ずテレンバッハの「秩序志向性」の概念に基づきメラニコリー親和型論をいま一度振りかえってみて、そこに両極性躁鬱病の病前性格像の雛形が可能態として潜在しているかどうか検討する。次いで、単極性を包摂しうる両極性の躁鬱病論として提唱されている森山、クラウスの両理論を、本稿に資する限りにおいてではあるが、要約的に紹介し且つ若干の批判乃至批判的再構成を試み、実際に『異邦人』のいくつかの挿話の解釈に適用してみる。更に、特に単極性という限定は付されていない、土居の鬱病論の中核を成す「甘え」の概念を両極性の観点から見直し、最後に躁鬱病における素質因と環境因の問題を問うて次節への橋渡しとする。

(Bの項続く)

〔注〕(第3節つづき)

- 274) テレンバッハ、前掲書、p.320. / 275) 同書、p.318. / 276) 同書、p.308. / 277) 同書、p.320. / 278)-279) 同書、p.309. / 280) 同書、p.302. / 281) 同書、p.299. / 282)-283) H.スィーガル『メラニー・クライン入門』、岩崎徹也訳、岩崎学術出版社、p.115. / 284) テレンバッハ、前掲書、p.120. / 285) 同書、pp.121-125. / 286) 同書、p.123. / 287) 同書、pp.247-249. / 288) 同書、p.267. / 289) 同書、p.124. / 290) 同書、p.257. / 291) 同書、p.218. / 292) 同書、p.250. / 293) 同書、p.262. / 294) 同書、p.257. / 295) 同書、p.255. / 296) 同書、p.248. / 297) 同書、p.158. / 298) 同書、p.276. / 299) 同書、p.249. / 300) 同書、p.168. / 301) 同書、p.223. / 302) 同書、p.258. / 303) 同書、p.261. / 304) 同書、p.259. / 305) 同書、pp.261-262. / 306) 同書、p.102. / 307) 同書、p.101. / 308) 同書、p.102. / 309) 同書、p.272. / 310) 同書、p.264. / 311) 同書、p.102. / 312) 同書、p.163. / 313) 同書、p.157. / 314) 同書、p.124. / 315) 同書、p.103. / 316) 同書、p.385. / 317) 同書、p.284. / 318) 同書、p.103.